
青紫色の夏

黒木猫人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青紫色の夏

【Nコード】

N3062I

【作者名】

黒木猫人

【あらすじ】

生徒会長 青村紗季先輩とのひと夏。何があるわけじゃないけど、先輩と一緒にいる時間はどこか心地よくて……。夏休みをお題にしたショートショート。

俺の部屋にはエアコンがない。だから夏休みに突入する頃にもなると、地獄のように暑かった。

対し、妹の部屋にはエアコンがあった。母親曰く、妹が優遇されるのは単純に女だからで、「見た目平凡、成績平凡の冴えない十七歳の男子高校生であるあんたなんか、今年の夏も童貞のまま灼熱の自室で勉強してりゃあいいのよ」とのお達しだった。男女差別反対っていうか、実の息子にそこまで言うことなくね!?

故に、今年もまた図書館で涼みながら一夏を終えることになるのだらうと思っていた。

まさに救いの女神と言えるであろう彼女から電話が掛かって来る、その時まで。

「おい御剣。どうせ夏休み中、宿題もしてないで暇だらう? だったら生徒会室に手伝いに来い。お前のような奴でもいないよりはマシだ。ん? いや待てよ……本当にマシか?」

最終的に疑問形になったのが少し気になったけれども、生徒会長と会えるならこの生徒会書記こと御剣智也、是が非にでも行きますとも! 生徒会室にはエアコンもあるしね、むふっ

かくして夏休みが始まったばかりの八月三日、くそ暑い日差しの中、恥ずかしげもなく鼻歌&スキップで出掛ける男子高校生の姿がそこにはあった。というか、俺だった。

俺は生徒会長 青村紗季先輩が大好きである。どれくらい好きかと言つと、目の前にはんつが干してあつたら迷わず盗んで、その場で「盗つたどー!」と大声で叫んでもいいくらい大好きである。そこらの下着泥棒とは根性が違う。どうだ、参ったか。

高校に着き、生徒会室の扉を開けると、楽園エデンが広がっていた。そこは暑いという概念から抜け出た別世界で、統治者は余りにも美しい。

程好いカールが掛かった明色で豊かな髪を背中に垂らしており、バストとヒップは大きく、ウエストは細く高く、脚はモデルのように長い。

フランス人形みたいな顔立ちをした会長は、奥の席に座り、肩肘を着いたまま振り返った。

「遅い、待ちくたびれたぞ」

「ぐあああつ！」

俺は自身の両肩を抱え、その場で転げ回った。

ヤバい、楽園過ぎる！

エアコン効きまくってめっちゃめっちゃ涼しいし、傍らには愛しの生徒会長の姿。

「心も身体も癒されて、一石二鳥ってわけですね会長！？」

「……何言ってるんだ、お前は？」

数多のライバルとの激戦を潜り抜け、生徒会に入った甲斐があったというもの。生徒会で本当に良かった、生徒会最高！

「それにしても会長。夏休みなのにどうして生徒会室に？」

感激が落ち着いて来たところで、疑問だったことを尋ねてみた。

「ぶっちゃけて言うとな、私の部屋のエアコンが壊れたんだ。母にまず相談したのだが、今年の夏は扇風機で過ごせとおっしゃった。

私の家が高校に近いことは御剣も知っていたいよう？ それならばと思い、この生徒会室を選んだわけだ。生徒会長として、部活等で何かあった時に対処出来るよう、常に待機していきたい、と校長先生に熱く語ったら、喜んで部屋の使用許可を出して下さいさったぞ」

「で、生徒会室でゲームをしているわけですか……」

会長は画面が二つある携帯ゲーム機を片手に、肩肘を着いていた。「夏前に出た国民的RPGだぞ！？ 夏休みにプレイしなくてどうする！ ところがだ……前作に比べて割とあっさりストーリーをク

リアしてしまつてな……肝心のマルチプレイをしないと今いち盛り上がらない」

「だから暇になつたつてわけですね。あの、俺……そのソフト持つてますけど」

「何っ、本当か！？ レベルは幾つだ！ というか明日から持つて来い！ あっ……と言つても、明日以降が暇ならだが……」

「だ、大丈夫です、暇です！」

その日から、俺は夏休みの日々を生徒会室で過ごすこととなる。

楽しい時間はあつという間だと言うが、それからの三週間は本当に短かつた。国民的RPGは会長とアホみたいにやり込んで、ほぼ全クリしたと言つていい所まで行つた。宿題も一緒に片付けた。会長の態度はいつも通りで、良いムードになんて一度もならなかつたけど、俺は会長と二人でいられるだけで嬉しかった。

そうして幸せを噛み締めながら後一週間を過ごそうと思つていた八月二十四日、幕切れは突然にやつて来た。

「会長、壊れましたね」

「……ああ、見事にな」

生徒会室のエアコンが故障したのだ。うんともすんとも言わなくなつた。

「夏休み中、昼間はずっと付けっぱなしでしたからね」

「……」

そりゃあ壊れてもおかしくないだろう。

楽園から一転、熱帯のジャングルと化した生徒会室は、今が夏であることを改めて教えてくれた。

それから会長が職員室に行つて、教師に掛け合つた。しかし、修理は夏休みが終わつてからだと言ひ切られてしまった。休み明けに学校のエアコンを一斉に点検するのだそうだ。

「まあ、生徒会室でやりたい放題でしたから、仕方がないと言えば仕方がないですね」

「ああ、分かっているよ」

まだ午前中だが、会長と二人並んで学校からの帰り道を歩く。夏休みに入ってから、ごく普通のこととなっていた。

会長の家の前に着くと、ホースで庭に水を撒いている美佐さんがいた。並ぶと姉妹にしか見えないが、会長のお母さんである。

この人とも夏休み中に知り合った。

「ああ、紗季ちゃんと智也くんじゃなあ。今日は早いねえ」

「ええ。今日はちよつと……」

会長はいつものように俺を見て、

「それじゃあな、御剣。また明日」

家の中へ入って行った。

翌日、我が家は相変わらずの灼熱地獄だった。

生徒会室のエアコンも壊れてしまったし、涼む場所はもはや図書館くらいしかない。仕方なく俺は出掛けることにした。

午前中だというのに外はいつにも増して暑い。

図書館に向けて歩いていると、途中でスーパーのビニール袋を下げた美佐さんに出会った。

「ああ、智也くん、今から学校お？ 紗季ちゃんならもう先に行ってるわよお？」

「えっ？」

どうして会長が学校に。生徒会室のエアコンは壊れているというのに。

俺は何となく学校に足を向けていた。

先に職員室に行き、鍵がないことを確かめてから、生徒会室に向かう。

生徒会室には人の気配が感じられなかった。エアコンの稼働音はせず、蝉の鳴き声だけが廊下に響いている。

扉を開けて中に入った。途端にむわつとした熱気が全身を包む。床に工具箱と脚立が置いてあった。何故、と思うよりも先に、

「会長ッ！！！」

その人が倒れていることに気付いた。

会長をベッドに寝かせ、濡れたタオルを額に被せた後に気付いたのは、ここが彼女の家で、彼女の部屋だということだった。

「智也くん、そのリモコンでエアコンの温度を調節出来るからあ。私は下にいるから、何かあったら呼んでねえ」

「はい」

美佐さんは「大丈夫よ」と微笑んで、一階に降りて行った。

「どうして会長はあんなことを……」

生徒会室の床にあった工具、脚立はおそらくエアコンを直す為のものだろう。

「う……御剣……?」

会長がゆっくりと目を開ける。

「会長、大丈夫ですか!？」

「この部屋は……暑い」

「ちょっと待ってて下さい。今、エアコンの温度を下げますね……あれ?」

ふと気付く。

確か、会長の部屋のエアコンって壊れてたはずじゃ

会長は、リモコンに伸ばした俺の手を掴んで、言った。

「暑いんだ……」

その顔は真っ赤に染まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3062i/>

青紫色の夏

2010年10月8日14時46分発行